

学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第9号】
令和2年
1月20日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

新しい年を迎えて

教育長 勝亦 重夫

年始めの早朝に近くの公園を走っていると、早くも花穂を出し始めたネコヤナギ越しに、雪花粧をした凛々しい富士山をくつきりと見ることができました。元号が令和となり初めての年変わりでしたが、それにふさわしい光景でした。皆さんも、清々しい気持ちで新しい年を迎えられたと思います。本年も充実した教育活動ができるようによりしくお願いたします。

◆ 授業を変える ◆

いよいよ小学校の新しい学習指導要領が令和二年度から、

中学校では令和三年度から完全実施となります。外国語科の新設や観点別評価の変更等様々ありますが、何と云っても大きく問われているのは「授業の在り方」です。

私が教員になった四十年前でも、どうすれば授業の質を高めていけるかが大きな教育課題として議論されてきました。学校の中心となる授業ですから当然のことです。時代もこのことが課題となってきました。それだけ、授業は奥が深いということを示しています。

様々な形の授業分析が行わ

れています。いつも問われてきたのが「教師の授業中に話す時間」です。なぜ重要視されるのかは、教師が話をする分、子供たちが考えたり、友達と交流をして考えを深めたり、作業をしたりする時間を奪ってしまうからです。授業を単に知識を伝える時間という捉えであれば、いかに効率的に分かり易く話をすればいいわけですが、今、授業に求められているのは全く違うことを皆さんは承知されています。

新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、まずは「教師がしゃべりすぎる授業」から脱却することです。自分の授業を振り返る中で、いったい自分は一時間の授業の中で、どのくらい子供たちに話しているのか客観的に把握する必要があります。私

自身がそうでしたが、自分が思っている以上に話をしていく現実があります。

授業を構想する中で、「子供たちが獲得する資質・能力を明確にする」「子供たちが考える時間を十分確保する」「子供たちの活動の時間を保証する」このようなことを意識することで、授業改善が進んでいきます。

授業の主役は何といつても子供たちです。「教える授業」から「引き出す授業」に転換して、教室内が子供たちのやる気一杯になることを期待します。



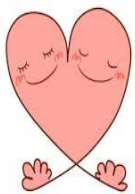
◆ 神戸の不祥事から ◆

昨年の十月に報道された、神戸市の小学校教員によるいじめ(傷害)事件に多くの先生方は心を痛めたことと思います。いじめは、社会でも大きな問題となっており、注目されています。各学校では、いじめをしつかりと認知し早期に対応して重大化を防ごうと努力

をしています。そんな中で起こった事件です。

加害者側の教師からは「嫌がっているように見えなかった」「軽いつもりでやった」「指導のつもりでやった」と、小中学生が言い訳でよく使うフレーズが出てきました。この教師からは、教育者としての自覚や矜持が全く感じられません。

子供にとって教職員というにはどのような存在なのでしょう。大人として親の次に近い存在が教職員です。大人としての立ち振る舞いを、子供たちは大人から学んでいきます。それだけに、教職員には言動の一致が求められています。「これはしてはいけないよ」「こうすればいいね」と子供たちに言ったことは、自らを守り実行しなければ信頼されません。大人としてのモデルが沢山いる御殿場の学校でありたいと願っています。



教育センターだより

風 薫 る

よき授業を組織してやら なかつたら申し訳ない

指導員 土屋 英次

よい授業を組織してやらなかつたら申し訳ない

私は、中学校の訪問が主ですが、どの中学校も生徒が落ち着いて、学習に専念できていることに感心させられます。幼稚園・保育園、そして小学校・中学校まで、どれほど丁寧な指導が積み上げられてきたのだろうと先生方の努力に頭が下がります。素晴らしい生徒の実態なのに、良い授業を組織しなかつたら申し訳ないと感じるのは、私だけではないと思います。

私が教員のころは、興味のない授業だと教室から出ていくか、寝ているか私語で収集がとれなくなるかなどヤンチャな生徒がたくさんいました。だから、授業は、そのような生徒にも興味を持てるよう必死で工夫しました。そして、授業計画の記録を残し、実践しながら常に修正していきました。**授業記録ノートの作成**

◇高根中学校の長倉美里教諭は、採用二年目の英語教師です。英語の授業プランと実践記録はもろんのこと道徳の指導計画と実践記録もA4のノートに一時間当たり見開き二ページの記録がきちんとなされています。

一ページ目は、本時の指導計画(指導案や板書計画など、二ページ目は、授業実践記録で板書は撮影した写真を貼り、生徒の反応や記録を書いたり貼ったりしています。当然、教師の反省や今後の改善点なども記入されています。

私の場合は、ルーズリーフ用紙(差し替えが容易)に、授業計画と実践記録を残し、毎年積み上げてきました。このような記録が次年度の授業の質を高める貴重なデータにもなります。道徳の指導記録ノートは、高根中だけでなく他の学校でも実践されています。どの先生も、何らかの授業計画と実践記録を残されています。

ると思います。自らの授業の質を高めるためにも、指導案や授業記録は、貴重な財産になると考えます。

考える時間をたっぷり

◇富士岡中学校の飯島和夫教諭の理科指導案検討後の授業です。電流と電圧の関係を導き出すテーマで、乾電池の数と豆電球の明るさの演示実験をしてから、電流と電圧の関係はどうなるか予想に理由づけをして、発表させました。電圧が上がると「電流は増える」と「変わらない」の二つの予想になりました。検証する追究の場面では、電源装置と電熱線を使う説明と最大電圧だけを限定して、生徒に科学的な説得力のある結論が出るまですべて任せました。もちろん教師は、実験班を回りながら適切な助言や支援に忙しくまわりますが、どのようにデータ処理するかは、生徒に任せました。

◎回路の作成でも、班内で様々な対話があり、ようやく完成する。電圧と電流のデータも最初は適当に電圧を上げて測定していたが、生徒相互の話し合いで、数学の関数表の

ように一、二、三、...と電圧を上げて電流計の記録を取っていた。実験完了後そのデータから概ね比例の関係になるだろうと推測できたが、説得力のあるデータ処理ではないので一時停滞。それこそ生徒相互の意見の出し合いと沈黙もあった。その場面での「誰にでも納得してもらえぬ処理は？」との教師の言葉かけにより、徐々にグラフ化に気づいていく。五分以上悩んだ班もあつたが、グラフを書き始めた。そこでまた対話的な活動が必要になる。縦軸・横軸は、「何にする?」「単位は?」「モリは?」「直線で結んでよいのか?」等主体的であり対話的な学びが必然的にできた。多くの教師がやりがちであるが、測定データ表を提示し、グラフ化を指示していたら、このような生徒相互の対話は生まれにくい、試行錯誤しながらの科学的な思考は生まれなかつたはずだ。

◇原里中学校の石川晴基教諭の技術科の指導案検討後の授業では、「かんなの刃を調節して、できる限り薄く削ることができる」だけに絞り、生徒がかんな削り作業しながら、刃の調節にことん挑戦させた授業でした。課題目標は、教師

の自らの実演による「かんなの削りかす(大工さんなみ)」です。かんなの刃について、初めて生徒に、拡大写真での調節のポイントを提示して説明し、一時間その写真を掲示したまま支援になるようにしていました。一人一台のかんなを用意し、全員が先生の実演した「かんなの削りかす」を目指して、繰り返し挑戦できるようにし、活動時間をたっぷり与えていました。生徒が活動している間、教師は、つまづいている生徒や班に指導助言や支援ができていました。

◎目指す技術的課題が、教師の実演で明確になっていたの、どの生徒もそれに挑戦しようとする意欲がみられた。一人一台のかんななので、自ら考え刃の調節をしなければならぬ。必然的に班内で、質問したり教えたり教わったりする生徒の相互の対話が生まれ、うまくできた理由やうまくできない原因を共に考え合う場面もみられた。一人一人が創意工夫して、取り組んでいるが、時間が十分あったので試行錯誤しながら、何をどうすればよいのか真剣な思考と対話がみられた。